

フロストの遊び心

Frost's Playfulness

山 津 さゆり
Yamatsu, Sayuri

ABSTRACT

In this thesis, I will take four poems, “The Wood-Pile,” “Two Tramps in Mud Time,” “Mending Wall,” “The Road Not Taken” from among Frost’s poems and examine his playfulness revealed in them. Though some criticize the playfulness as inappropriate in poems, I think that it plays an important part in his poems. I would like to show how to appreciate them, paying close attention to his subtle playfulness. My opinion is that his playfulness is no mere device for making his poems more pleasurable to read, but that it shows his firm belief that work is play for mortal stakes.

1.

ロバート・フロストは、アメリカの著名な現代詩人（1874～1963）である。彼はニューイングランドの自然を舞台に動物もしばしば詩に登場させるなどして、写實的また象徴的な詩を数多く書き国民的な詩人となった。しかし批評家の中には、彼の詩には俗悪なところがあるとして嫌うものもある。

イアン・ハミルトンは、*Robert Frost: Selected Poems* の序文の中で、“Stopping by Woods on a Snowy Evening” という詩の中の馬の描写はほめているが、動物の扱いが俗悪化されて好ましいものでなくなっているとする詩をいくつか例に挙げて批判している⁽¹⁾。彼はその例として、“Pea Brush” の蛙と “The Wood-Pile”

(1) Ian Hamilton, introduction, *Robert Frost: Selected Poems* (Harmondsworth: Penguin Books, 1973) 19.

の鳥の擬人化による描写を挙げている。しかしながら、それらの描写は、それぞれの詩において非常に重要な役割を果たしているように思われる。フロストの詩の中の描写には一見無駄なように思えるものや、読者をわざと欺くようなものがあるように思われるが、それに騙されてフロストのそのような詩を軽視してはいけないのではないだろうか。

ハミルトンが例に挙げた描写について見てみよう。“The Wood-Pile”の中の次のような鳥の描写が、ハミルトンにとっては詩にはふさわしくない「絵本の中の擬人化」と思えるようである。

A small bird flew before me. He was careful
To put a tree between us when he lighted,
And say no word to tell me who he was
Who was so foolish as to think what *he* thought.⁽²⁾

しかしながら鳥の擬人化による描写はこの4行だけではなく、この後もさらに9行続いているのである。ハミルトンは13行を引用して批判してもよかったのではないだろうか。さらに言えば、全体で40行の詩の中で、およそ3分の1にあたる13行も詩としてふさわしくないところがあるような詩を、詩選集の中に入れるべきではなかったのではないだろうか。この点は、ハミルトン自身が詩の格式にこだわりながらもこの詩の何かに魅力を感じていることを暗示していると考えられる。言い換えるならば、不適切と思わせるような鳥の描写がこの詩にはいかに不可欠なものであるかを暗示するものであると考えられる。これについては本論で詳しく述べることにする。

ここでは、ハミルトンがもう一つ悪い例として挙げた“Pea Brush”の蛙の擬人化による描写も実は非常に有効な働きをしているのではないかということを、本論に入る前に考察しておきたい。“Pea Brush”という詩は1連4行の6連からなる詩であるが、問題の蛙の描写は3連目に出てくる。

(2) Edward Connery Lathem, ed., *The Poetry of Robert Frost* (London: Jonathan Cape, 1972)
101. フロストの詩の引用はすべてこの版に拠る。

The frogs that were peeping a thousand shrill
Wherever the ground was low and wet,
The minute they heard my step went still
To watch me and see what I came to get.

この中で4行目がよくないとされているのであろうが、この描写全体はまわりの土地の状況を、視覚的な面からだけでなく聴覚的にも伝えているという点で非常に大切な部分である。1連目で詩人が豆の木の支えとするための白樺の木の枝をもらいに友人のところへ行ったことが述べられ、2連目ではその暑い日の描写と切られた木の樹液の臭いでむっとしたことが述べられている。私たちの感覚に直接訴えかけてくるこのような描写に続く3連目の描写は、まったく自然で有効なものであるとすることができる。そしてこの描写の重要性はさらに4連、5連、6連を見ていくことでより一層明らかとなる。4連目では切られた木の枝で押しつぶされた野性の花をいとおしむ気持ちが述べられており、5連、6連目では切られた木の枝は園芸には役に立つが、野性の花には役に立つどころか花を押しつぶしてしまっていると述べている。結局詩人は詩のタイトルを“Pea Brush”としながら野性の花をいとおしむ気持ちをこの詩でうたっている。この詩の真意は自然をいとおしむということにあるのである。園芸で使われる“pea brush”によって象徴される人工の世界と野性の花によって象徴される自然の世界という2つの世界が、この詩で提示されていると見ることができるのである。この意味において、蛙は人工の世界に対峙する自然の世界の門番のような存在として描かれていると解することができる。従って上で引用した3連目の第4行は、不適切な擬人化の例としてとらえるよりはむしろ、自然と人工という伝統的な問題をさりげなく提示するという非常に重要な役割を果たしている箇所としてとらえるべきであろう。

このように、フロストは詩のタイトルを詩の真意からわざと脇へそらせることによって読者を惑わせるようなところがあるように思われる。読者は、フロストの詩におけるタイトルの付け型、一見わかりやすそうな言葉、詩の価値を落

とすのではないかと当惑させるような動物の擬人化による描写に細心の注意を払う必要がある。彼の詩が一見単純そうに見えてそうではなく、彼の詩には簡単には読み解けないような遊び心たっぷりの工夫がなされているということを認識する必要があるのではないかとということを提起したいと思う。そこで、以下の本論においては“The Wood-Pile”, “Two Tramps in Mud Time”, “Mending Wall”, “The Road Not Taken” という4篇の詩について詳細に考察して、上で述べたことを論証してみたい。

2.

“The Wood-Pile” については序論で言及したように、ハミルトンは、鳥の擬人化による描写のせいでこの詩の価値が引き下げられていると批判しながらも、自ら編んだ詩選集にこの詩を入れざるを得なかった。このことは、この詩にふさわしくないように見える鳥の描写（ハミルトンは4行しか指摘していなかったが、実は13行もある）が、この詩の3分の1を占めながらもその価値を下げるどころか高めることに大いに役立っているのだということを意味している。この詩の魅力が鳥の描写によってますます際立っているのである。この詩における鳥の描写の不可欠性とこの詩のもつ魅力を考察してみよう。

鳥の描写の不可欠性を論じる際に鍵となるのは、この詩の真意をどのように解釈するかである。次のように解釈することによって鳥の描写がいかにこの詩になくてはならないものであるかがわかるであろう。この詩は、無用の用についての詩であると解釈することができると考えられる。詩は大きく2つに分けることができる。前半は後半の導入部として無目的の様が詳しく述べられている。そして後半で“a pile of wood”を通して無用の用の重要性が語られていると思われる。前半もさらに2つに分けることができ、その前半では詩人が何の目的もなく凍った沼地を歩いている様子が描かれ、その後半では対照的に神経質なまでに目的を持って行動する鳥の姿が描かれていると解釈できるのである。鳥の描写は無目的な様を最大限に際立たせるために極めて重要な役割を果たし

ているのである。

詩は次のように始まり、詩人は語り手として無目的な様子を、卓越した観察力と描写力をもって語っている。

Out walking in the frozen swamp one gray day,
I paused and said, "I will turn back from here.
No, I will go on farther—and we shall see."
The hard snow held me, save where now and then
One foot went through. The view was all in lines
Straight up and down of tall slim trees
Too much alike to mark or name a place by
So as to say for certain I was here
Or somewhere else: I was just far from home.

この部分は一見するとあまり意味のない描写のように思われるかもしれないが、フロストは無用の用というテーマを導き出すために、目的のない散歩や特徴のない風景を描いている。引用の2行目と3行目は、詩人が何の目的も持たずただ散歩していることを、語り手自らのごく日常的な言葉で述べている。“The view was .../ Or somewhere else” という描写は、フロストの描写力に圧倒される部分である。彼は何の特徴もない木立ちの風景を言葉で克明に描くという至難の業を、簡単な言葉を用いてさりとやっつけてのけている。そしてさらに、この特徴のない風景の描写の表現の仕方によって無目的ということが象徴的に示されている。“to mark or name ...” や “So as to say ...” という目的を表わす表現が使われているが、“Too much alike” という表現によって目的そのものが拒絶されているのである。このような表現の仕方をすることによって無目的ということが強調されているように思われる。人間の些細な目的を一蹴する大自然の悠然たる様を感じ取ることができる。そして引用の最後にある “just far from home” という表現は、無目的であることを徹底的に強調する重要な表現である。詩人は、人間の小さな居場所としての家、それは様々な目的で充満してい

るかもしれない、そのような家から、何かを求めることもなく「ただ遠く離れているだけ」と言っている。家から出て様々な目的から逃れようという目的さえも持っているのではない。この表現は非常に淡々としたものではあるが、無目的ということ象徴的に表わしたものとして読むべきであろう。

このように無目的ということが畳み掛けるように強調された直後に、執拗なまでに目的を持った行動をとる鳥の描写が続く。

A small bird flew before me. He was careful
To put a tree between us when he lighted,
And say no word to tell me who he was
Who was so foolish as to think what *he* thought.
He thought that I was after him for a feather—
The white one in his tail; like one who takes
Everything said as personal to himself.
One flight out sideways would have undeceived him.
And then there was a pile of wood for which
I forgot him and let his little fear
Carry him off the way I might have gone,
Without so much as wishing him good-night.
He went behind it to make his last stand.

鳥は、何の目的も持っていない詩人が自分の尾の白い羽根を手に入れる目的を持って自分のことを追いかけていると思込んでいる。そして鳥は詩人とは対照的に神経質なまでに目的を持った行動をとる。ハミルトンがこの引用の最初の4行のみを取り上げて「絵本の中の擬人化」の最たるものとしたのは、もったなことであろう。それは小さな子供を喜ばせるような描写なのかもしれない。しかしながら大人になっても鳥の何気ない行動を見てみると実に興味深いのは確かである。この描写を読んで、子供っぽいと感じながらも口元を緩ませずにはいられないであろう。フロストは読者のこのような心理をうまくとらえ

て、ここでさらに9行、鳥の描写を続けることによって、読者を意図的に絵本の世界に招き入れていると考えられる。この詩に対する親近感を作り出しているであろう。だが注意しなければならないのは、絵本の世界だからといって軽視したり、ただ鳥の擬人化を面白がっているだけではないということである。この鳥の描写は、前に描かれている無目的な様を際立たせるためにフロストが巧妙に設えた世界なのだということを認識する必要がある。

鳥の描写によって表現されているものは、無目的な様とは対照的である。何の目的も持っていない詩人のことを自分の羽根を狙って追いかけてくる人間と思ひ込み、詩人と自分の間に枝を置いて詩人を近づけないようにしようとする。かといって詩人が進みそうな方向とは全く異なる方向へ飛び去ることもせず、わざわざ詩人の目に止まった積み上げられた薪の後ろに隠れて最後の抵抗をしようとする。詩人は薪の山に目を奪われてもはや鳥のことなど忘れているのにもかかわらず、ことさらに薪の山の方へやって来てまで、詩人に抵抗を示すためにあくまでも目的を持った行動をとろうとする鳥の姿が描かれている。鳥のこのような複雑な心理や執拗な行動は、文体によっても表されているように思われる。“...tell me who he was / Who was so foolish as to think what *he* thought.”のような口語体でありながら関係代名詞を使った長く続くわかりにくい文章が、それを表わしていると言うことができるのではないだろうか。鳥は積み上げられた薪の後ろに隠れてなおも目的にこだわるが、ここで興味深いのは、その薪の山が詩の後半で語られる無用の用を象徴するものであるということである。目的を執拗なまでに考える鳥が、目的を担わされていない無用の薪の山の後ろに隠れたというのは対照の妙というものである。

詩の後半において、この積み上げられた薪は、置き忘れられた無用のもののようであることがわかる。この薪の山のことは非常に優れた観察力と描写力によって詳細に語られており、それは、導入部としての詩の前半で語られた無目的の様を再度浮かび上がらせるものとなっている。そしてフロストは、そこからさらに無用の用という概念を導き出すのである。目先の利益に執着して目的ばかり

を重視した気ぜわしい生活を送っていると気がつかないような事柄に、彼は思いを馳せるのである。

. . . I thought that only
Someone who lived in turning to fresh tasks
Could so forget his handiwork on which
He spent himself, the labor of his ax,
And leave it there far from a useful fireplace
To warm the frozen swamp as best it could
With the slow smokeless burning of decay.

フロストは無用の薪の山を残した人のことを考え、その人について “Someone who lived in turning to fresh tasks” 「次々と新しい仕事に向かうことで生きている人」と述べている。そして、そのように絶えず新しいことに挑戦することで生きている人だけが、自分が苦勞して手に入れたものや作り上げたものを忘れることができるのであると、フロストは語っている。このような人は、すぐに役立つようなことをしたり、すぐに役立つようなものを作ったりするという目的を持って仕事をするのではなく、仕事をする事自体が楽しくて仕方がないのである。“leave it there far from a useful fireplace” という表現では、無目的な仕事を楽しむ生活と目的に執着する生活を対照させているとすることができるように思われる。さらにフロストは、このように無目的な仕事を楽しむ人の残した無用の産物が、実は大自然の中では、人間の忙しい世界の中とは違った意味で役立っているということを述べている。人間の世界ではすぐに役立つことが重視されるが、自然の世界では、引用の最後の2行にあるように、無用のもののように思えるものでさえ自然の長い時の流れの中でゆっくりと役立てられていくのである。

3.

“Two Tramps in Mud Time” では、仕事は命がけの遊びでなければならない、

ということが語られていると解釈することができる。そこで9連から成る詩を、1連ごとに内容を捉えていきたいと思う。

1連目では、詩人が木を割って薪を作る仕事をしているところに二人の放浪者がやって来て、彼らのうちの一方が詩人に声をかけ、もう一方は先を進んでいく様子が語られている。詩人は声をかけた放浪者が報酬を目的にその薪割りの仕事をやりたがっていることを十分理解していた。先に進んでいるもう一人は無関心なようだが、実は二人が一緒になって薪割りの仕事を詩人から奪おうとしているのである。このことは、6, 7, 8連目にそれぞれ, “...coming with what they came to ask”, “They thought all chopping was theirs of right.”, “They knew they had but to stay their stay / And all their logic would fill my head.” とあることからわかる。

2連目では、詩人が薪割りの仕事に打ち込んでいたことが述べられている。3連目は季節の描写であり、天候の変わりやすい4月のことを述べている。

4連目では “bluebird” が登場して、次のように描かれている。

A bluebird comes tenderly up to alight
And turns to the wind to unruffle a plume,
His song so pitched as not to excite
A single flower as yet to bloom.
It is snowing a flake: and he half knew
Winter was only playing possum.
Except in color he isn't blue,
But he wouldn't advise a thing to blossom.

“The Wood-Pile” と同様に、ここでもフロストの鋭い観察眼と豊かな描写力が感じられる。“bluebird” は風に頼って、羽ばたきで乱れた羽根を整えてもらおう一方、自分自身も何かの役に立つことをしようとする。3連目にあったように、4月といっても天候が変わりやすく、雪もちらつき冬は眠ったふりをしているにすぎず、花が咲くにはまだ早いのである。このことを花に知らせてまだ咲かな

いようにと、“bluebird”は親切に助言を与えるのである。自然界では自然のものの同士が相互に依存しあい、助け合って生きている。人間の世界ではそれが非常に難しいということを、フロストは自然についての優しく繊細な描写を通して読者に突きつけている。しかしこのようにまとめるとこの連の解釈としてはあまりにしかつめらしくなってしまうであろう。実は、この連の最後から2行目が全くの駄洒落になっているのである。“bluebird”は文字通り「青い」色の鳥であるが、この行では「身体の色以外は、その鳥はブルーではない」とやや謎めいたことが述べられている。“blue”という言葉に2つの意味、つまり「青い色の」という意味と「憂鬱な」という意味が込められているのである。なぜこんなところで駄洒落が必要なのかと思わせるようなものかもしれないが、これこそがフロストの遊び心なのである。フロストは、駄洒落を喜びそうな読者が不意をつかれて面食らっている姿を思い浮かべながら、笑いをこらえて書いていたかもしれない。しかしながらこの行からも“bluebird”の優しい気持ちは十分伝わってくる。ただの駄洒落に終わってはいない。鳥は自分としては春の訪れにはしゃぎたい気持ちなのだが、か弱い花のことを思いやって自分の気持ちを抑えている。

5 連目は4月の春泥の様子が詳しく描かれている。

6 連目では、二人の放浪者に薪割りの仕事をとられまいと、詩人が今までになく必死で仕事をする様子が描かれている。

The time when most I loved my task
These two must make me love it more
By coming with what they came to ask.
You'd think I never had felt before
The weight of an ax-head poised aloft,
The grip on earth of outspread feet,
The life of muscles rocking soft
And smooth and moist in vernal heat.

詩人が自分の仕事を最も楽しんでいた矢先に、あいにく二人の放浪者がやって来て報酬欲しさに詩人の仕事を奪おうとしたために、詩人はますます仕事に打ち込むこととなった。詩人が薪割りの仕事に打ち込む様子が4行目以降に述べられている。人がその熱心な様子を見ればこの詩人は今までに薪割りの仕事をしたことがなかったのだと思うほどに、詩人が必死になって仕事をしているということが語られている。第三者の目を想定した客観的な語りが読者を戸惑わせるが、このような淡々とした語り方によって、かえって、詩人の薪割りの仕事への異様なまでの執着心が浮き彫りにされているように思われる。この連では、自分の仕事を取られそうになると今まで以上に大切なものと思われて熱心に仕事をするという人間の心理がよく描かれている。

7連目では、二人の放浪者が薪割りの仕事は当然自分たちのものであると考えていること、そして彼らが人の斧の使い方でしか人を判断することができないような人間であることが述べられている。

8連目では、詩人は楽しみで仕事をしているのであるが、彼らは必要に迫られて仕事をする、そしてその場合には必要に迫られて仕事をする者の方がその仕事をする権利があるという彼らの論理が述べられている。

最終連では、放浪者たちのような論理に「誰が従おうとも」 (“...yield who will to their separation”), 詩人の生きる目的は「愛と必要」を統一することであるということが述べられている。詩人にとって仕事とは「命がけの遊び」 (“play for mortal stakes”) でなければならないのである。

この詩には、詩人が一人であるのに対して放浪者が二人現れるが、それは仕事に対する考え方に関して俗人がいかに多いかを象徴していると考えられることもできよう。

4.

“Mending Wall” という詩は、タイトルと最終行に書かれている “... ‘Good fences make good neighbors.’” からは塀が大事であるということを述べたもの

であるような印象を与える。しかしこの詩の1行目, “Something there is that doesn't love a wall” で, 全く逆の印象が与えられている。ここに早くもフロストの遊び心が現れているように思われる。

この詩を最初から詳しく見ていきたい。

1行目から4行目では, 積み上げられて作られた石の塀が自然によって優しく崩されている様子が描かれている。それに対して5行目から9行目の途中まででは, ハンターが身勝手に容赦なく塀を崩す様子が描かれている。“...they have left not one stone on a stone” という表現からは, 重なり合う石が全くないほどに徹底的に崩されている状況が伝わってくる。ここには自然のもつ優しさと人間の無情な側面のコントラストがある。もちろん自然が優しいといっても, 自然の神秘的な力には人間は太刀打ちできない。“The gaps I mean, / No one has seen them made or heard them made.” という表現は, そのことを語っていると考えられよう。

12行目には “I let my neighbor know beyond the hill.” とあるが, これは詩人の優しさを表わすものと考えられる。詩人自身は塀は必要ないと思っているのであるから, 崩れたままにしておいてわざわざ隣人に知らせなくてもよさそうなものなのだが, 塀に執着している隣人の気持ちを思いやって知らせるのである。13行目から20行目までは, 隣人と一緒に石を積み上げ直して塀の修繕をする様子が描かれている。

この後に続く2行, “Oh, just another kind of outdoor game, / One on a side. It comes to little more.” には, 再びフロストの遊び心が現れている。彼は, 二人が境界に沿って歩きながら両側から塀を修繕していく仕事を, 両サイド一人ずつのゲームのようなものにすぎないと語っている。塀を修繕することはこの詩人にとっては必要のないことであるにもかかわらず, 詩人は隣人に付き合っ

て楽しみながら仕事をしているのである。このような詩人の陽気さが, 遊び心の溢れた表現によって伝わってくる。

しかし詩人は, 隣人に付き合いながらも, 塀は必要ないのではないかという自

分の考えを話してみる（23 行目から 26 行目）。それに対して隣人は、後に明らかになることであるが、彼の父親の教えの言葉である「立派な塀があれば隣人とうまくやっていける」ということを口にするばかりである（27 行目）。そこでまた再びフロストの遊び心が顔を出す。“Spring is the mischief in me.”（28 行目）という表現は、春の陽気に誘われて詩人にいたずら心が起こったということを述べているのであるが、詩人自身の陽気な茶目っ気そのものを示唆しているようにも思われる。

28 行目の終わりから 38 行目の途中まででは、詩人が隣人に新しい考え方を植えつけることができればと思うが、結局は他人が言って聞かせるのではなく、自らが新しい考えを述べるのでなければ駄目なのだと思うに至るということが語られている。そして詩人は、目の前の隣人を見て、「知」を全く寄せつけようとしない頑迷さを感じ取るのである（38 行目の終わりから 42 行目）。37 行目の終わりから 38 行目の途中までで、“I'd rather / He said it for himself.” と述べられていたように、詩人は、隣人に自分で考えて新しい考えを語ってほしいと望んだのであるが、それは無駄だと気づくのである。詩人は、隣人について次のように語り、詩を終えている。

He will not go behind his father's saying,

And he likes having thought of it so well

He says again, “Good fences make good neighbors.”

隣人は、詩人から新しい考え方を聞かされても、「立派な塀があれば隣人とうまくやっていける」と繰り返すばかりである。しかも、その言葉は彼自身が考えたものではなく父親が言っていた言葉なのである。そして彼はその言葉の真意を深く考えようとしめない。彼はその言葉を思いついたことをとても気に入っている。彼は思いついたということだけで満足しているのである。

この詩でフロストが本当に言いたかったことは、塀あるいは境界が必要かどうかということではなく、どんな仕事でもその仕事が本当に必要なものかどうかということを自分でよく考えて取り組むことが大事であるということなので

はないだろうか。

5.

“The Road Not Taken” という詩は、1 連 5 行、4 連からなる詩であり、各連、1, 3, 4 行目と 2, 5 行目でそれぞれ韻を踏んでいる。詩の内容は人生の選択についてであり、比較的理解しやすいようであるが、実は非常に微妙な解釈を要する詩であるように思われる。この点に注意しながらこの詩を詳しく見てみたい。

1 連目において、二つに分かれた道を前にしてどちらの道をとるべきか迷う詩人の姿が描かれている。詩人は「残念ながら二つの道をとってしかも一人の旅人であることはできない」(“...sorry I could not travel both / And be one traveler, ...”) と語っている。一人の旅人は一つの道しかとることができない。それは自明の理であるが、このように表現されることによって、選択というものを簡単なことと考えてはならないということを改めて思い知らされる。また詩人は、「一方の道をできる限り遠くまで見通した」(“...looked down one as far as I could”) と述べている。ここにはフロストの謙虚さが現れているように思われる。彼は、自然や運命に対して人間がいかに力に限りのある存在であるかを示していると考えることができよう。

2 連目において、詩人はもう一方の道を、「全く同様に美しいが、草深くてまだ踏みならしかたが足りないゆえにおそらくより選ばれる権利を持っているものとして」(“..., as just as fair, / And having perhaps the better claim, / Because it was grassy and wanted wear.”) 選択した。また詩人は、二つの道に関して、人々によって踏まれている点では「ほとんど同じ程」(“about the same”) であると言っている。さらに 3 連目においては、二つの道は「同様に」(“equally”) まだ踏みつけられていない落ち葉に埋まっていたと語られている。こうして見てみると、二つの道は同じような道であることが述べられているように見えるが、微妙に異なっていることが述べられているように思われる。*Roads Not Taken* という批評集の中である批評家は、学生にこの詩を読ませたところ二つの

道の違いがわからないと言ったということを紹介している⁽³⁾。しかしこれで二つの道についての解釈を終わりにするのは早計であるように思われる。詩人は、上で見たように、一方では二つの道は美しさという点や落ち葉に埋もれた状態において全く同じであるということを強調しているが、他方では、選んだ道には“the better claim”があると述べたり、二つの道は踏まれ具合については「全く」ではなく「ほとんど」同じだと述べたりしている。実はこのような述べ方をすることによって、同じように見えるものでも微妙な違いがあり、それを見分ける力が必要であるということが示唆されていると解釈するべきではないだろうか。詩人は2連目、3連目を通して、選ぶということには同じように見えるものの中に微妙な違いを見分ける識別力が必要であり、その意味で選択するということは大変困難な仕事であるということを、読者に再認識させようとしているように思われる。3連目で詩人は、選ばなかった方の道はまた別の日のためにとっておいたと述べながら、もとに戻ることは不可能であることを十分認識している。ここでも、選択という仕事の重みや厳しさが強調されているように思われる。

最終連において詩人は、次のように語っている。

I shall be telling this with a sigh
Somewhere ages and ages hence:
Two roads diverged in a wood, and I —
I took the one less traveled by,
And that has made all the difference.

引用の3行目の終わりから最終行にかけての3行は、詩人の、選択に際しての高揚感や自らの選択についての自負心を感じさせる。代名詞の“I”が繰り返されているところは、1行目の“sigh”と韻を踏ませるためのフロストの単なる遊びと考えられるが、選択を前にした気持ちの高まり、緊張感を表わすための強調表

(3) Andrew Lakritz, “Frost in Transition,” *Roads Not Taken: Rereading Robert Frost*, ed. Earl J. Wilcox and Jonathan N. Barron (Columbia and London: University of Missouri Press, 2000) 211.

現と解釈することもできよう。けれどもこのような詩人の高揚感や自負心は、1行目の「ため息混じりに語る」という表現によって抑制されているように思われる。ここにもフロストの遊び心や優しさ、謙虚さが感じられる。

この詩についてハミルトンは、詩全体に厭世観が漂っており、詩人にとってどちらの道を選択するかは問題ではなかったと言っている。⁽⁴⁾しかしながら、上で述べたように、この詩においてフロストは、人生における選択という重大な仕事には微妙な違いを見分ける識別力が必要であるということを語り、厭世的であるどころか人生に対して非常に前向きである。さらに詩人は、自分の人生における選択に対する自負の気持ちを謙虚に表現できるほどの余裕さえ示しているのである。

6.

フロストは、これまで考察してきた詩からわかるように、生活や仕事において余裕の精神を持つことの重要性を説いているとすることができるであろう。彼の詩自体にも遊びがあり、身を以て余裕の精神を示している。しかしながら、“Two Tramps in Mud Time” にあったように、遊びといっても真面目なものであり、「命がけの遊び」でなければならないことを、詩人は念を押すかのように語っている。彼はある散文の中で、“It [a poem] begins in delight and ends in wisdom.” と述べている。⁽⁵⁾詩は楽しくなければならぬが、いかに生きるかについての“wisdom”を与えなければならぬと、彼は述べている。だからといって、詩人は、読者に知者になるように言っているわけではない。個々の詩を通して、読者に人生の生き方についての様々な指針を示してくれているのである。

オーデンは、フロストについてのエッセイの中で、フロストの“The Lesson for Today”という詩の最後の2行、“I would have written of me on my stone: / I

(4) Hamilton, introduction 18-19.

(5) Edward Connery Lathem and Lawrance Thompson, eds., *Robert Frost: Poetry and Prose* (New York, Chicago, and San Francisco: Holt, Rinehart and Winston, 1972) 394.

had a lover's quarrel with the world.”について、“Frost convinces me that he is telling neither more nor less than the truth about himself.”⁽⁶⁾と言っている。オーデンは、フロストが自分の墓碑銘には「私は世の中を愛するからこそ文句を言ってきた。」と書いてほしいと語ったことは、フロストの文学者の気取りのない、一人の誠実な人間としての純粋な気持ちを表した言葉であり、説得力のあるものであると述べているのである。フロストは、詩の中で遊びながらも誠実に前向きに人生に向き合い、世の中を墮落から再生へ導くためにいかに生きるべきかについての知恵を模索したと言うことができよう。詩人はそれを飾らない言葉でありのままに語り、詩という灯台に灯を点していったのである。

この拙論において扱った4篇の詩それぞれにおいても、フロストは墮落から再生への道を指し示そうとしてくれている。“The Wood-Pile”においては、詩人は、何にでも意図や目的がなければ駄目だとする余裕のない生き方から無目的に仕事を楽しむ生き方や無用の用ということに我々の目を向けさせようとしている。“The Two Tramps in Mud Time”は、仕事というものは金儲けだけのためにするものではなく、命がけで楽しむためにするべきものであるということ論を説くようにしている。“Mending Wall”では、詩人は人の言う通りの生き方から自分で考えて行動する生き方へと読者を誘おうとしている。そして“The Road Not Taken”は、人生における選択の重大さを我々に再認識させ、多くの人が通る無難な道よりも困難な道を選ぶことによっていかに充実した人生を送ることができるかを教えようとしている。

このようにまとめると如何にも説教調に聞こえるかもしれないが、フロストの詩はそれを直接に感じさせない。フロストの茶目っ気のある遊び心が、まさにそれを優しく包み込んでいるのである。

(6) W. H. Auden, *Selected Essays* (London: Faber and Faber, 1962) 163.